

講義レジュメ

講 師 竹迫 祐子

内容・テーマ

人を育て、地域をつくる博物館の役割 期 日 2020年12月9日

「人を育て、地域をつくる博物館の役割」 美術館を育てた地域と人—安曇野ちひろ美術館の25年—

1977年世界で初めての絵本の専門美術館・いわさきちひろ絵本美術館の誕生

1997年ちひろの心の故郷・長野県松川村へ 安曇野ちひろ美術館の誕生

農業の村に生まれた8000坪の村営公園と、そのなかの絵本美術館

第一次基幹産業・農業の村が突然、観光地へ!? 幕開けは、村内から苦情電話

■世界からお客様を迎える絵本の拠点、そして、地域の文化の拠点になる美術館をめざして

開館時当初から、地域との連携、小中学校との連携を模索

●近隣美術館との提携：安曇野アートラインの創設(1997年~)

●教育委員会、学校との提携：中学生ボランティア、

●保健センターとの提携：「ファーストブック」プレゼント

●社会福祉協議会との提携：安曇野寄席(独居老人も誘って…)

●松川村図書館との連携：お話し会、絵本作家を招いての講演会やWS

●大学との連携：武蔵野美術大学(安曇野サマースクール) 松本大学

●村民との連携：国際交流(村の民泊第1号は韓国の若手絵本作家)

■子どもから高齢者まで、村民みんなが楽しく元気で活躍できる拠点づくりをめざして

2016年「トットちゃん広場」の誕生

村には、畑の先生だらけ! みんなが活躍できるトットちゃん広場

田植え、肝試し、運動会、秋祭、ウォーキング…

<point1> “村と村民、地域が、美術館を育てくれた” ともに育ってこそ、生まれる可能性

<point2> “観光は、その地に暮らす人たちの幸せのおすそ分け”(建築家・内藤廣さんのことば)

■さて、問題はこれから——パンデミックの前と後、大きく変貌する時代に、私たちは…

〔参考文献〕

『安曇野ちひろ美術館をつくったわけ』(松本猛：著) 新日本出版社

『長寿のひみつ—松川村はなぜ日本一なのか—』(山根宏文：編集) 創成社

「美術館の可能性をさぐる—中学生ボランティアの10年」(竹迫：著)

『絵本の事典』朝倉書店

「絵本美術館および絵本原画等を所蔵する美術館・博物館・文学館」 「絵本の原画展」(竹迫：著)

参照：ちひろ美術館HP chihiro.jp

講義レジュメ

内容・テーマ

博物館関連施策の動向

講 師 中尾 智行

期 日 令和2年12月9日

I 文化庁の50年

II 文化政策と博物館の興り

III 博物館を取り巻く法と環境

IV 博物館と文化観光

V 文化庁の博物館施策

VI コロナ禍と博物館

講義レジュメ

講 師 小 川 義 和

内容・テーマ

多様な資源を活用した教育普及活動の展開期 日 平成2年12月10日

1. 連携する理念の共有

日本博物館協会の報告書「対話と連携の博物館」が刊行されてから20年たち、この間に博物館が連携することが当たり前になってきた。連携とは「異なる使命を持つ機関がある目的・理念に基づき連絡を取り合い、協力して事業を行うこと」である。連携することが目的ではなく、連携の理念と目的を共有することが重要である。改めて連携の意義とその効果について事例をもとに議論を深めたい。

2. 事例研究

岡田努氏（福島大学）から、行政、学校教育、社会教育が連携し、教育プログラムの充実を図る「ふくしまサイエンスぷらっとフォーム」の事例についてご紹介いただく。連携する前にどのような課題意識があったか、多様な「地域資源」を「どのように」組み合わせ、連携しているか、「つなぐ仕組み」や共有できる「理念」「目的」は何か、連携により、学習者、博物館、地域にどのような影響を与えたか、などの視点を持って事例を考察する。

3. 連携から博物館機能の拡張へ

これからの博物館は「施設としての博物館機能に加え、博物館と博物館を取り巻く環境からなる文化空間において、多様な主体と連携・協働する機能を併せ持つ機関である。」と考え、地域にある資源をつなぐことで、博物館の機能が拡張していく。各博物館が持つ特徴的な資源と地域の多様な主体をつなぎ、地域全体として教育力を高めていくことが、変化の激しい、不確実な社会において、博物館の存在意義を高め、発展につながる。

4. 地域の知をつなぐ専門人材としての学芸員

連携事業や教育活動は館のミッションを実現するためにある。これからの学芸員には、資料の収集保管、調査研究、展示・教育とともに、地域の資源を見出し、知をつなぐ役割がますます重要になってきている。

〔参考文献〕

日本博物館協会「対話と連携の博物館-理解への対話・行動への連携-【市民とともに創る新時代博物館】」, 2000

小川義和編著「協働する博物館 博学連携の充実に向けて」ジダイ社, 2019

事例発表レジュメ

内 容 ・ テ ー マ	多様な資源を活用した教育普及活動の展開
実 践 事 例 名	地域の自然と科学と文化にふれて学ぶ ふくしまサイエンスぷらっとフォーム(spff)事業について
事業主体（実施機関）	福島大学 ・ 福島県（商工労働部産業創出課）
連携・協力機関等	福島県試験研究機関(4) 県内博物館等社会教育施設（6） 企業(2) 各種団体(2) 個人(5) 他
発 表 者	岡田 努（福島大学・教授）

期日 2020年12月10日

内 容

2008年にJSTの支援により福島大学が中心となって発足した、「ふくしまサイエンスぷらっとフォーム spff」（以下「spff」とする。）事業の概要を紹介する。

かつて博物館業界では「博学連携」、大学などでは「地域連携」などが推進されたが、関連施設や大学研究機関がそもそも少なく、県内の移動交通手段も便利とは言えない福島県でなぜ、何のために県内の多様な施設が連携することになったのか。

spff事業の発足の中心は教育機関ではなく、県の試験研究機関（公設試）であったことが大きな特徴と言えよう。科学系博物館、図書館、企業、各種団体を巻き込み、どのような事業展開をしたのか、現在では県内外の自治体からネットワークづくりの支援要請を受けることもあるが、何を支援しているのか。成功例と課題のいくつかを紹介する

〔参考文献〕

佐藤公・岡田努，「spffを通して地域の自然と文化と科学を学ぶ10年の活動」『全国科学博物館協議会発表大会報告集』26巻，2019年2月，pp.81-87.

岡田努，「科学系博物館における学習システム「PCALi」の成果と課題について」『福島大学地域創造支援センター』28巻，2号，2017年2月 pp.72-81.

岡田努，「郡山市ふれあい科学館における地域連携事業について」

『日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要』第8号 2004年 pp.65-74.

講義レジュメ

講師 金山 喜昭

内容・テーマ

博物館活動と地域づくり

期 日 令和2年12月10日

はじめに

① ICOM 京都大会の決議

② 地域の諸問題

中教審答申「人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について」（平成30年12月21日）

1. 博物館に問われること

・博物館の使命を再確認する⇒施策・事業・評価のサイクル

2. 政策連携をはかる

① 政策連携の考え方

② 官民協働による新たな地域経営の統治形態と「地域ガバナンス」

3. 野田市郷土博物館の事例

① 政策連携：行政・市民協働による博物館運営

② 博物館を拠点にした市民のネットワークづくり

4. 博物館が地域の核の一つとなりコミュニティをつなぐことの意義とは

・地域学の拠点となり、歴史、生活、文化を次世代に引き継ぐ

・お互いに認め合うギブ&テイクの関係性

・個々人のコミュニケーションの関係性と信頼感の形成

・市民の対話する空間をつくり出す

・市民がまちづくりや地域課題への意識をもち、課題解決に取り組む。

〔参考文献〕

金山喜昭『公立博物館をNPOに任せたら—市民・自治体—地域の連携』同成社、2012

金山喜昭編『転換期の博物館経営』同成社、2020

佐藤一子 2014「市民の学びが拓くまちづくり」野田市郷土博物館・市民会館年報第6号

デューイ『民主主義と教育』（松野安男訳）岩波文庫、1975

事例発表レジュメ

内 容 ・ テ ー マ	博物館活動と地域づくり
実 践 事 例 名	地域資源「鉄道」を活かして ～資料館再生とまちづくり～
事業主体（実施機関）	新潟市（文化スポーツ部歴史文化課）
連携・協力機関等	J R 東日本(株) 新津商店街組合連合会 新津観光協会 等
発 表 者	水澤 喜代志

期日 令和2年12月10日

内 容

- 1 日本の鉄道の要衝「西の米原 東の新津」
 - ・新潟市新津地区は昭和30年～40年代に「西の米原東の新津」と呼ばれる鉄道の要衝
 - ・SLが60両、客車400両が配属され、様々な鉄道機能が新津に集中
 - ・労働者の4人に1人は鉄道関係者で鉄道のまちの最盛期

- 2 鉄道産業と市民意識の衰退
 - ・昭和40年代後半から鉄道は電化され鉄道機能は新潟駅へ、鉄道のまちの衰退
 - ・昭和58年、市民発意で旧鉄道病院を活用した初代鉄道資料館が開館
 - ・平成10年、現在の箇所に移転するが倉庫展示風で来館者は年間7千人程度
 - ・資料館の存在を認識する人は地元民でも少数で「鉄道は過去のもの」という認識

- 3 地域資源の掘り起こしと資料館のミッション
 - ・平成23年合併市町村の文化施設の見直し作業を行い鉄道資料館のリニューアルを決定
 - ・新津鉄道資料館活性化基本計画を策定し、鉄道は「地域資源」であり「文化」である
ととらえ、資料館のミッションに地域との連携・共存などを与える
 - ・ミッションを受け、商店街、観光協会、区役所、市民と協働でイベント、商品開発、
学校連携、商店街賑わい事業などを展開し「鉄道の街にいつ」の復活と郷土の愛着を
呼び起こす。資料館はその中心施設となる。

- 4 その他 「コロナ禍にあって」
 - ・今年は集客事業ができなかったが新しい生活様式でのイベントをJR新潟支社、JR
東日本企画、新津商店街、新津観光協会、市で急遽実施

講義レジュメ

講 師 半田 昌之

内容・テーマ

様々な学習ニーズに応えるプログラムの工夫
日

期 日 令和2年12月10

講義レジュメ

講 師 三橋 弘宗

内容・テーマ

様々な学習ニーズに応えるプログラムの工夫期 日 12/10 (木)

博物館に求められる学習ニーズは極めて多様である。多くの博物館、特に国内の博物館のケースでは義務教育との関連や一般の親子連れリクリエーションや観光の一環としての博物館利用が想定される場合が多い。本来的に社会教育施設は、多様な世代への対応が求められる。未就学児やその指導者の支援もあれば、より深く学びたい小中学生、高校や大学での高度な科学的探究、社会人や高齢者に対する学びの機会提供や、より専門的な教育の実施、公官庁の専門職員や学校教員、ときには海外機関などあらゆる世代やセクターに対して、出来る限り多様な教育機会を提供することが役割である。可能であれば、これらの多様なセクター間をつなぎ、新たなネットワークや重層的な関係性を構築することで、新たな価値創出を志向すべきである。しかし、人員や予算、労力、専門性には限りがある。何でもかんでもを対象に教育プログラムを展開するのではなく、博物館が所有するリソース、特に標本資料を基軸とした事業展開としなければ際限がなくなる。また、学習機会の提供やプログラム構築は、そのこと自体がゴールではなく、理想的には、地域の社会課題解決や人材育成、政策形成や支援との親和性、いわばアドボカシー的要素が必要となる。

このため、多様な学習ニーズに対応するには、文字通り多様な方法による連携や協働を通じて多様で柔軟な学習プログラムを構築することになる。博物館が主体的にプログラムを実施する場合もあれば、ハブとなって体制を支える場合、学校単体を支援することや、プログラム移転を意図した関わり方、全国的なネットワークの1パートとして支援する場合など、色々なケースがある。こうした多様な学びのパターンについて当博物館および連携先や各種ネットワークが、どのように機能し、実施しているのか、実際の事例をもとに紹介し、パターンランゲージ化することで、キーとなる要素を抽出するとともに、学習プログラム間の連関構造について説明し、多様なニーズを受け止める多様なレセプターとしての学習プログラムが連動するための仕組みについて解説する。話題提供では、高校生が実施するキノコ展の事例、自然再生事業の実施、博物館ネットワークによる展示、“共生のひろば”と呼ばれる県民によるなんでも発表会を例にあげて、学習プログラム構造の在り方を紹介する。

(参考)

人と自然の博物館における生涯学習プログラムの主な実施体系

(館内：野外観察会)

- ・フロアスタッフによる定期イベント（デジタル紙芝居、ワークショップ、展示解説）
- ・セミナー（定期的、オンデマンド、出張、屋外観察会）
- ・企画展を通じた関連プログラム
- ・連携活動グループによるイベント
- ・大学等の高等教育の実施と連携支援（博物館実習を含む）
- ・共生のひろば

(アウトリート)

- ・キャラバン事業（キッズ、一般）
- ・シンクタンク事業（各種団体や機関への支援、イベントの支援など含む）
- ・ネットワーク事業（博物館連携）

(バーチャル)

- ・ホームページでの配信

[参考文献]

水辺の小さな自然再生 <http://www.collabo-river.jp/>

講義レジュメ

講 師 鬼本 佳代子

内容・テーマ

さまざまな学習ニーズに応えるプログラム 期 日 2020年12月10日

福岡市美術館の教育普及活動 「どこでも美術館」を中心に

1. 福岡市美術館の概要

1979年開館 2016年～2019年までリニューアルのため休館
2019年3月にリニューアルオープン

2. どこでも美術館について

1) どこでも美術館とは？

- ・美術館に来にくい／来られない子どもたちへのアウトリーチ
- ・高齢者向けアウトリーチ（公民館）
- ・福岡市内小中学校への教材貸し出し

2) どこでも美術館のきっかけ

3) どこでも美術館の目的

- ・休館中（2016年9月1日～2019年3月）も、学校団体をはじめ、これまで当館を利用していた多くの方々に美術に触れる機会を提供する。
- ・リニューアル開館後は、引き続き、高齢者、障がい者、未就学児童など、美術館を訪れることが困難な方々や、訪れる機会が少なかった方々に対して、積極的に出前講座を行うことにより、美術に触れる機会を提供する。
- ・視覚だけでなく、触覚等の実体験を伴った鑑賞体験を提供する。

4) どこでも美術館の教材を作るにあたって

5) 実施数

3. 多様な活動展開するために

- 1) 異種館との連携活動
- 2) コロナ禍の中で

講義レジュメ

講 師 大木 真徳
(青山学院大学コミュニティ人間科学部)

内容・テーマ

社会教育施設における事業の実際 期 日 2020年12月11日

- 1 社会教育施設としての博物館
 - ・ 「社会教育施設」としての位置づけ
 - ・ “フォーマルではない教育” のための施設

- 2 社会教育施設としての共通点・相違点 - 公民館・図書館との比較 -
 - ・ 《共通点》 地域課題への総合的な取り組み
 - ・ 《相違点》 多様な設置主体や館種

- 3 社会教育施設の事業計画を考える視点
 - ・ 要求課題と必要課題 <必要課題の要求課題への転換>
 - ・ 専門的職員の役割

- 4 博物館による“地域づくり”とは
 - ・ 教育（“人づくり”）による“地域づくり”
 - ・ さまざまな社会教育施設の実践や議論の蓄積

〔参考文献〕

鈴木眞理・井上伸良・大木真徳編『社会教育の施設論』（講座 転形期の社会教育Ⅲ）学文社, 2015年.
国立教育政策研究所社会教育実践研究センター編集・発行『社会教育経営論ハンドブック』, 2020年.

大木 真徳 m_oki@ccs.aoyama.ac.jp

事例発表レジュメ

内 容 ・ テ ー マ	社会教育施設における事業の実際
実 践 事 例 名	地域コミュニティの形成を目指した公民館活動 ～ひとが変わりまちが変わる～「学びのカフェ物語」
事業主体（実施機関）	広島県大竹市立玖波公民館
連携・協力機関等	地域・小・中学校、近隣企業等
発 表 者	大竹市立玖波公民館 公民館職員 河内ひとみ

期日 令和2年 12 月 11日

内 容

「学び革命」公民館の可能性を信じて

・ 施設の概要

近年高齢化に伴い独居高齢者や空き家が多く、子どもの数も減少して、商店街も空き店舗が目立つ。地域住民の繋がりも薄いなど多くの課題がある。

玖波公民館は設立40年を迎え老朽化が進み、新規の来館者も少なく、自主事業も趣味趣向のものが多く、マンネリ化していた。

・ 事業の概要

7年前にイメージアップを図るため立ち上がり「おしゃれな学び空間」を創るための事業「学びのカフェ」をスタートさせた。

- ① 「学びのカフェ」スタート
- ② 「地域ジン学びのカフェ」にバージョンアップ
- ③ 「地域ジンまちカフェプロジェクト」誕生
- ④ 「中学生地域ジン」誕生
- ⑤ 地域まるごと大イベント「まちカフェ」開催へ

・ 事業の成果・波及

事例発表レジュメ

内 容 ・ テ ー マ	社会教育施設における事業の実際
実 践 事 例 名	地域の中の図書館
事業主体（実施機関）	日野町図書館
連携・協力機関等	
発 表 者	日野町図書館 湯原愛子

期日 2020年12月11日

内 容

移動販売車等と連携した出前貸出を通じた利用希望調査や、店舗や病院、集会所など、人が集まる場所に選書した本を入れた本箱を置く出前図書館「よらいや図書館」等の取組を通じた図書館活動の充実・拡大について、取組の経緯と実際（様々な機関等とネットワークをつくられた経緯等も含む）、成果・課題等について事例発表する。

講義レジュメ

講師 佐々木史郎

内容・テーマ

人と地域の未来を拓く博物館の可能性期 日 2020年12月11日

2020年7月に国立アイヌ民族博物館が開館した。本博物館はアイヌ文化復興のナショナルセンターと位置づけられた「民族共生象徴空間」（愛称「ウポポイ」）の中核施設の一つである。その設立の理念には、「日本の先住民族であるアイヌの尊厳を尊重し、国内外にアイヌの歴史・文化等に関する正しい認識と理解を促進するとともに、新たなアイヌ文化の創造及び発展に寄与する」と謳われている。

アイヌ文化はウポポイの基本構想（2016年）で「我が国の貴重な文化」といわれているものの、明治時代以来の開拓政策と同化政策によって存亡の危機に立たされるような状況にある。しかし昨今、社会的、文化的多様性が社会をより活性化させるという認識が定着して、社会的な少数者である先住民族アイヌの文化が見直されてきている。政府も、文化だけでなく、アイヌ民族出身者の生活向上や経済活動の支援を政策に盛り込み、そのための法律も整備した（「アイヌ施策推進法」2019年）。

そのような状況下で、アイヌ文化の展示、調査研究、教育普及、資料整備に特化した国立博物館が設立された。本講義ではこの博物館の設立意義を問い直していきたい。すなわち、この博物館の理念、機能、特徴を解説しながら、アイヌ民族の未来を切り開くことが、いかにして我が国の社会の活性化、さらには人類社会全体の未来を切り開くことにつながるのかについて考えていきたい。

〔参考文献〕

- 佐々木史郎 「先住民族と歩む博物館を目指して——国立アイヌ民族博物館の開館に寄せて」『博物館研究』55(10)(No.629): 2-5、2020年
- 佐々木史郎 「文化多様性とミュージアム：国立アイヌ民族博物館の試み」（特集「地域の文化資源とミュージアム」）『文化資源学』18: 51-60、2020年
- 佐々木史郎 「アヌココ・アイヌ イコロマケナル：新国立博物館設立への道」『季刊民族学』171号、pp. 3-10、2020年